

(別紙1)

総括研究報告書

課題番号：30 - 17

課題名：小児緩和ケアにおける質の評価尺度の開発と測定

余谷暢之 (所属施設) 国立成育医療研究センター
(所属・職名) 総合診療部緩和ケア科 診療部長

(研究成果の要約) 本研究の目的は、小児緩和ケアの質の評価尺度を開発し、全国調査を実施することである。そのために①小児終末期治療の実態を明らかにし②家族が望むこどもの終末期について明らかにするための遺族調査の準備を行った。また今後の終末期ケアの質の向上につながる基礎資料として看護師の症状評価の実態を明らかにする全国調査を実施した。小児終末期医療の実態については DPC データを用いて小児がん患者の終末期積極的治療の実態について明らかにし報告した。遺族調査に向けた質問紙を作成した。また、小児集中治療室における疼痛評価の実態と看護師のこどもの疼痛に対する意識に関する全国調査を行い、実態と課題について明らかにした。

1. 研究目的

本研究の目的は、小児緩和ケアの質の評価尺度を開発し、全国調査を実施することである。

小児領域では緩和ケアの質を測定する尺度が定まっておらず、全国レベルでの緩和ケアの質の評価が社会的に望まれている。緩和ケア体制の整備と合わせて緩和ケアの質の保証が行われなければ以下のような課題が起こりうる。第一に、質の保証がない場合に不適切な治療やケアが行われる可能性があり、それにより患者家族の受ける苦痛が増す可能性がある。第二に、サービスを提供している側がよいケアを提供していると思いきなり、個別の事例ですべてを評価したりすることは医療者の職業倫理に反することがある。

本研究によって、初めて「全国的な」小児緩和ケアの質の評価を行うことができ、かつ、今後緩和ケアの質に関して、経年的な変化、都道府県別・病院種別の評価を行うことが可能になる。

2. 研究組織

研究者 所属施設

余谷暢之 国立成育医療研究センター
松本公一 国立成育医療研究センター
諫山哲哉 国立成育医療研究センター
新城大輔 国立成育医療研究センター
壺井伯彦 国立成育医療研究センター
清水薫 国立成育医療研究センター
山下華奈 国立成育医療研究センター
吉田沙蘭 東北大学大学院教育学研究科
名古屋祐子 宮城県立こども病院

3. 研究成果

本年度の研究成果として以下の成果が得られた。

1) 医療費支払いデータベースを用いた国レベルの小児緩和ケアの質の評価方法の開発と測定

血液悪性腫瘍児と固形腫瘍児の積極的終末期ケア (EOLC) を比較し、血液悪性腫瘍児の積極的 EOLC に関連する因子を記述するために、DPC データを用いて検討を行った。その結果、血液悪性腫瘍の小児は、固形腫瘍の小児と比較して、積極的 EOLC を受ける可能性が高く、血液悪性腫瘍の子どもでは、年齢が低いことと入院期間が短いことが、積極的 EOLC と関連する可能性が明らかとなった。

本結果については、BMC Palliative Care

誌に報告を行った。

また同様に PICU, NICU の終末期積極的治療の実態について DPC データを用いて明らかにするために積極的治療の Quality Indicator を開発し検討を行った。

2) 遺族評価による小児終末期患者のケアプロセスの評価尺度、患者の QOL 評価尺度の開発と測定(プロセス・アウトカムをみるための質の評価尺度の開発)

今後小児がんで子どもを亡くした遺族への質問紙調査を行う準備段階として、遺族調査用紙の原案を作成した。質問紙の妥当性と遺族にとって侵襲の少ない調査方法の検討のためのフォーカスグループインタビューを予定したが、コロナウイルス感染蔓延の影響で調査は実施できなかった。

3) 小児集中治療室における疼痛評価の実態と看護師のこどもの疼痛に対する意識に関する質問紙調査

小児集中治療室における疼痛評価の実態および看護師の小児の疼痛に対する意識について現状を明らかにするために、2021年2月に日本国内の PICU 35 施設で勤務する看護師を対象に質問紙調査を行った。その結果、疼痛評価尺度を使用することで、疼痛に関するコミュニケーションおよび疼痛管理の質の向上につながり、看護師の自信・満足度も向上する可能性があることが明らかとなった。

4. 研究内容の倫理面への配慮

人を対象とする医学研究に関する倫理指針に則り実施している。

研究については各施設の倫理委員会の承認を得て実施している。